

地域貢献プログラムの展開報告

上 憲治、片山 大蔵

Report of development of regional contribution program

Kenji Kami ,Taizou Katayama

1 地域貢献プログラムの目標

本プログラムは生活文化コースにおいて展開され、平成21年度で4年間継続している。

生活文化コースの教育目標は社会性を身につけることであるが、社会参加から社会貢献への積極性を高めることがそのカリキュラムに盛り込まれ、方法論的に工夫されているところである。

展開の場面は生活文化演習であり、1年次の生活文化演習Ⅰでは地域清掃や地域祭りへの参加などに留まるが、2年次の生活文化演習Ⅱでは本格的な取り組みが行われる。

以下は生活文化演習Ⅱについての報告である。

平成19年度に開始したこのプログラムの発展を期して先ず準備したことは以下の3点である。

①平成20年度から3年間「平成20年度私立大学等経常費補助金特別補助対象事業」を受けた。

②その展開に当たって、外部支援者として地域活性化の活動実践者に協力を依頼し、学生と地域のパイプ役として、双方の協力関係の活性化をはかった。

(本学客員研究員 片山 大蔵)

③地域住民を招いて地域貢献プログラムの発表会を行う。その取り組み目標はシラバスに記載してあるが、

①の支援者(片山 大蔵)はそれを踏まえ、次のようにまとめている。

地域貢献プログラム

学校周辺の「商店街」で、学生たちが行える事は何か?というテーマで、グループに分かれ、独自の目線で好きなテーマを考え1年間を通し、計画するというプログラムである。

漠然とした題材であり、また、現代の学生は、「商店街」という地域とはあまり親しみが無い環境を対応しなければならない、といった題材で少々学生は困惑する授業ではあるが、学生の独自の目線での発想を現実に進めていく為には、「想像力」「企画力」「計画性」「コミュニケーション能力」「プレゼン能力」などが養われるプログラムであり、当初の困惑していた学生たちも、このカリキュラムが進むにつれ、全体的な能力の向上が手に取る程に成長が見られ、大変喜ばしい成果が見受けられるようになっている。

学生の発想するテーマは、千差万別であり「商店街のキャラクターを作る」を皮切りに、「商店街の学生が行う宅配サービス」「学生が商店街に流すBGM」「商店街マップ」等等、様々な発想がテーマとしてあげられる。

また、この様々なテーマを進行していく上で、学生だけの内輪での対応で済まなくなることで、今までに付き合い合った事もない「店主」等との交流をこなさなければならない。現在までの成長過程では育まれていなかった「コミュニケーション」能力習得が、嫌でも進んでいかなければならないので、学生にとっては、とても身に付くカリキュラムとなっている。

その為には、相手に伝える為の「書類作成」や、テーマを進めていく上での「計画性」などが、問われるようになっていく。この対応は、現在多くの学生に見受けられる「内向的付き合い」を「社会的付き合い」に変化させる体験としては、とても充実する時間となっており、この書類作成などが、学生の「自信」を付けるきっかけとなっている。

そこには、自分だけが解る「主観的書類作成」ではなく、相手に伝える為の「客観的書類作成」を行わなければならないので、書類作成時には、「これで相手に伝わるのか?」という問い掛けを常に投げかけ、詳細な書類作成を心がけられる精神を育む。

またこの「問い掛け」を行うことで、「学生は自分勝手な楽観的な発想を行っている。」という事が、客観的に見られるようになっている。

また、現在社会は、「批判、否定」ばかりが先行しており、学生自身も「批判、否定されるのではないか?」という不安を常に持ち生活しているので、その「批判、否定」など、この授業では起こりえる事でないのに、常に、学生が発想するアイデアに対して「褒める」を心がけ、「自信」を付けられるようにしている。すると、独創的な学生ならではの、とても面白いアイデアが生まれてくる。

こうした指導の経過は確実に学生の進歩に成果が見られ、プログラムの後半に進むにつれ一人ひとりが生き生きしてくる状況を見るのは大変うれしいものである。しかしそれまでの指導にはなかなか苦勞し、毎年いろいろと工夫しなければならない。

2 地域貢献プログラムの展開と指導方法

地域貢献プログラムのスケジュールは以下の年間活動表に沿って、4～5人のグループワークを持って実践される。

1) 年間スケジュール

平成22年度 生活文化演習Ⅱ（2年）前期 予定表

No	実施日（金）		内容	その他
	月	日		
1	4	9	演習Ⅱ オリエンテーション インターンシップの現況と今後 演習のガイダンス 個別面談案内	面談時期 5～6月
2		16	WG	
3		23	演習Ⅱ 「地域貢献プログラム」説明 第1回 マーケティング実践法	前年度実績説明 地域見学
4	5	30	WG	
5		7	演習Ⅱ 夏祭り参加企画、他企画	屋台で何をやるか！
6		14	WG	
7		21	演習Ⅱ 第3回 マーケティング実践法	商店街調査とレポート発表
8		28	WG	
9	6	4	演習Ⅱ 地域貢献プロジェクト開始 チーム編成と方法説明 第1回ワークショップ	
10		11	WG	
11		18	演習Ⅱ 第2回ワークショップ 資料、意見、調査法、スケジュール計画	
12		25	WG	
13	7	2	演習Ⅱ 第3回ワークショップ プレゼン用レジメ作成	
14		9	WG	
15		16	演習Ⅱ 夏祭り参加に変更 ? → 8/24 or 25 評価と所見書提出	
予備日	未定			

平成22年度 生活文化演習Ⅱ（2年）後期 予定表

No	実施日（金）		内容	その他
	月	日		
1	9	17	演習Ⅱ オリエンテーション インターンシップの現況と今後 演習のガイダンス ふるさと祭り参加説明	
2		24	演習Ⅱ 「地域貢献プログラム」実践 ふるさと祭り参加企画	
3	10	1	WG	
4		8	演習Ⅱ ふるさと祭り参加企画、他企画	屋台で何をやるか！
5		15	WG	
6		17	西原商店会ふるさと祭り参加	未参加者中心
7		22	演習Ⅱ 「地域貢献プログラム」実践	
8		29	WG	
9		11	5	演習Ⅱ 地域貢献プロジェクト実践
10	12		WG	
11	19		演習Ⅱ 「地域貢献プログラム」実践	
12	26		WG	
13	12	10	演習Ⅱ 「地域貢献プログラム」実践	
14		17	WG	
15		24	演習Ⅱ プレゼンテーション発表と製作変更 評価と所見書提出	
16	1	14	演習Ⅱ プレゼンテーション発表と製作変更 評価と所見書提出	
予備日	未定	？		

) 地域貢献プログラムの内容は具体的には2つある。

①地域活動への参加

幡ヶ谷地区には年3回の地域祭りがあり、学生は模擬店を出店したり、祭りの準備・片づけ・他店応援などでこのイベントに積極的に参加するような指導が行われている。(以下は2か所の模擬店出店風景)



②地域活性化企画提案

地域の活性化に役立つ企画を立て、調査・編集・発表をし、地域や本学学生にも有効な情報などを配布している。

(企画案のプレゼンテーション用スライド例の部分)

③地域貢献プログラム発表会

平成22年度は1月下旬に設定している。②の作成レジメでプレゼンテーションする予定である。

こうした地域参加による社会性育成の活動によって学生の進歩には大きなものがある。

3) 片山大蔵氏はその経緯や問題点、効果などを次のように報告している。

地域貢献活動

現在、「核家族化」と言われ、祖父母との同居率が絶対的に少なくなっている環境や、隣近所との「井戸端会議」などが少なくなっている生活環境は、人と人が「触れ合う」「意思の疎通をする」などといった、「コミュニケーション」を取る機会が少なくなり、「価値観」「判断力」「思考力」など「一般常識」の入手先が、減ってきているのではないかとと思う。

「コミュニケーション」を取る時間の激減化は、「対相手」という「対人関係の形成」を育む上で、必要な時間だと思うのだが、現在、日本の家族の大半は、コミュニケーションを取る時間を大事にしている生活になっていないのではないかとと思われる。

そのコミュニケーションが育み難い環境下では、「希薄な世の中」「希薄な人付き合い」という負の副産物は、壮大であると思われる。

その「コミュニケーション不足による希薄な付き合い」は、学校生活でも伺える。相手の様子を伺いながらの付き合い方で、昼食時を例えると、「お昼する？」という友達への誘いは疑問符のつく投げかけ文句で、「お昼一緒に行こうよ！」という、「自分の意見を相手に述べる」という誘い方は、少なくなっているように見受けられる。これは、「自分の意見を押し付ける」と、敵対的に対応された時、「いじめの対象」になってしまうのではないかと、不安に付きまといわれているように見受けられる。「対相手心理理解能力不足」、簡単に思うと「コミュニケーション不足」が原因かと私は思う。

また、学生の一人一人と個人面談をすると、ここでも顕著にその様子があらわれる。多くの学生は、クラスでの普段自分の行動と違った発想を持っており、「本当の自分」という姿を隠しながらクラスメートと付き合いをしている。集団生活という「コミュニケーション」を取りながら生活をする事が、苦手になってきている表れだと私は考える。

コミュニケーション能力が欠如している場合、学校を卒業してからの他空間での新たな生活に困難な障害となる為に、社会問題にも成りつつある「短期間離職率」問題の要因の一つと考えられる。

このような現状を考えると、現在帝京短期大学で行っている「地域貢献活動」の授業は、学生生活を終了し「就職」をする上で、必要な「コミュニケーション能力の向上」を目的としており、学生への課題としては、

大変有意義な授業かと思われる。

この「地域貢献活動」を行っている箇所は2カ所である。帝京短期大学の学生が一番通学路として利用している、渋谷区にある駅「京王新線」の「幡ヶ谷駅」から、学校を結ぶ通りの「六号通り商店街振興組合」（八屋さんが2件もあるような、典型的な昔ながらの商店街）で活動を行う事と、渋谷区スポーツセンターを会場として、地元地域の人が実行委員長として、実行委員会を組織して行う「西原ふるさと祭り」という「お祭り」である。この2カ所の地元主催の催しに「会場の設営」や「片付け」「他出店店舗のお手伝い」「自店の出店」などとして参加している。

催し物の手伝いをする事で、学生自身の持っている、狭い空間での「発想」「想像」「常識」等が覆される体験の場となっている。

実体験として学生が感じ得るために、催しの準備段階で事前に一般的な「準備方法」「準備要領」などを教え、「見るポイント」「感じるポイント」を伝えておく。見るべき・感じるべきポイントを事前にしり活動することにより、自分自身が持ち得ていた「一般的常識が、違っていた。」というポイントが、直に伝わり率直な成長の糧となっているようになっていた。

その証拠に催し物の反省会時に、実行委員会メンバーより「催し物開催時には、学生が頼りなく、どう動いてくれるか分からない子たちだったが、片付け時には、率先して片付けを行ってくれ、一日で一気に成長した！」と驚かされる意見をうかがう事ができた。

具体例

「西原ふるさと祭り」時に、帝京短期大学で「わた菓子」販売を行った時のこと。

日頃は、教室の隅に一人にいるだろう？と、思われる学生がわた菓子を作っていたが、うまくわた菓子が出来ない。そこで、ちょっとした「目線」「発想の方法」などをアドバイスすると、他の学生が作る以上の大きなわた菓子が出来るようになった。

その「成功体験」が「自信」になり、他の学生が順番で作る時間になっても、一人で黙々とわた菓子を作り、「私は一番大きなわた菓子を作れる」というプライドを作り上げると同時に、今までの自分ではない、自分を確認するかのようになつた。わた菓子を作り上げていた。

また、他の学生に、同じように「目線」の持って行き方、「うまく作れるためには」を少しだけアドバイスすると、日頃の自分とリンクしたかのように、ただのアドバイスが歓喜溢れる「セリフ」を言われたかのように聞こえたのか、涙をにじませた後、わた菓子を自慢げに大きく作り上げていました。この学生は、日頃「コミュニケーション」が取れていなく、「正解」が何なのか戸惑う所に、「これが正解だよ」と、自身の答え合わせが出来て「ホッとした」と、涙を流しておりました。

他に、地元の商店街の方と親しくなり、前年のお手伝いで顔見知りになった商店主の方々に可愛がられ、催し後に「打ち上げに行こう」と誘われたり、「催しが終わっても店の方に遊びに来なさい」等といった、普段では知り合えない交流も育まれていた。

「自分のブースの物を売る為には？」という事を独自に考え、自分のTシャツの前後にポップを貼り付け、会場内を商品持ち売り歩くという独創的な発想をし、行動する学生も現れ、社会に出ても活用出来る行動への発展とみてとれた。

「コミュニケーション不足」による、「正解の解らない生活」「比較対象したいが出来ない付き合い」などを、「地域貢献活動」という活動において、「実体験」をすることでの、「答え合わせ」や、「実生活」の過ごし方「発想の方法」などを再確認出来る事によって、新たな他人との付き合い方、「方法」「手段」などを、習得する事が出来る機会となり、学生の日頃のストレスが緩和でき、また、「社会とは」という学生の勝手な思い込みの「未知の社会感」と「幻想社会感」を実体験化することにより、社会に出ていく「自身の基盤」を育む授業となっていると思えます。この体験は、言葉では表現出来ない成果が生まれている事だと確信しております。

片山氏は地域の事業主として、自分の地域の活性化に尽力しその貢献から地域で広く有名である。その目線で本学だけではなく現代の学生全般の傾向とそれに伝える指導面からまとめ、今後の指導法を睨んだ貴重な意見である。

3 評価

評価については、地域貢献プログラムの発表会の後の調査によって見る計画であり、原稿提出時には残念ながら間に合わない。

4 課題

社会性教育を目標とするカリキュラムを組むことは大変困難である。というのは、社会性教育は現代の学生に置いては講義だけによって可能となることは薄いと言えるからである。

現在躍進中の某国での学校に講師として招かれた友人の報告では、そこでは学生は息もつかぬほど熱心に聴講し、感動したそうである。しかし日本の教育現場では批判力や自由度と自己主張が高まり、分かり切った抽象論を素直に聴講する姿勢が希薄となっている。

目標は分かり切っていることであり、その講義より、そこに至る機会を豊富に提供することが肝心である。

そこで社会性教育への要求が高い現代では、高等教育においてもそれを身につける実践的なカリキュラムメニューが提供されなければならないのである。本取り組みはそうした歩みのプロセスであり、そのための効果的なカリキュラムを今後とも計画し実行していきたい。